Opening Symposium・オープニングシンポジウム

第一部

「肉体の純粋な詩を求めて
―宇宙の原理と、ゆらぎを結んだ、
総合芸術家オスカー・シュレンマーの
生涯と作品」

ラマン・シュレンマー
アート・ディレクター
オスカー・シュレンマー資料アーカイブ主宰

司会：新見隆

ラマン・シュレンマーさんとの出会い

新見　いま、1986 年の SONY の CM を見ていただきました。ドイツ語でシュレンマーが「トリアディッシュ・バレエ」と呼んだものです。英語でトリアディック。「三つ揃い」、「三つ組のバレエ」とも訳します。色も三つ、形も三つ、空間や動きも三つで、この三つが絡み合うということで、シュレンマーが名づけました。

こちらがラマン・シュレンマーさんです、お父様がインドからドイツの美術学校に留学されていた時、お母様と出会われてラマンさんが生まれました。半分インドの方、半分ドイツの方で、お母様がオスカー・シュレンマーの娘さんです。

私事ですが、1994 年にバウハウスの展覧会を企画しました時に、バウハウスの主要美術館であるベルリンのバウハウス・アルヒーフの研究者ドロステさんが「日本人という、すごく感性に優れた繊細な美意識を持った民族が、バウハウスのような生産とか構成とか社会主義にこだわった、ヨーロッパ的でドイツ的な、原理主義的で、いわば愚直な作品とか思想に、いったい興味を持つのだろうか」と尋ねられた。

バウハウスでは、カンディンスキーとかクレーとか有名な芸術家が先生だった。あるいは生徒だった。グロピウスとかミースとか、20 世紀の芸術、デザイン、建築の礎をつくった綺羅星のようなスターが揃った学校でした。第一次大戦後から第二次大戦前、ナチスによって閉鎖されるまでの短い間、危機の時代、苦難の時代に耐えながら、グループで集まって独自の文化をつくった。僕はいろんな場とか空間とか季節とかに対して、「ゆらぐ」繊細な感性を持った日本人が、今度は 21 世紀に向かって、ヨーロッパ的な、ある意味原理主義的なものを学ぶ必要があるんじゃないか、と話をしましたら、それなら貸しましょうと、多くの作品を貸してもらった経緯があります。

バウハウスというと当時、復興したドイツの貧しい労働者の人々のために良いデザインと良い暮らしを提供する、社会のために生産する、という非常にカッチリした生産主義が定説です。けれど、その実態は、日本で文献や作品集で知るものと、ちょっと違うのではないか、と僕が感じていた時にラマンさんにお会いしました。

オスカー・シュレンマーは彫刻も絵画もダンスもやった、すごく多面的な面を持った作家です。彼の中にもそういう日本人に通じるような「感性のゆらぎ」というか、危機に応じて感性を多様化していくものがあったんですね。東洋の感覚的な繊細さと西洋のもっている原理主義的な合理主義をあわせ持った個性のように僕は感じました。ラマンさんも当時のバウハウスの作家達の遺族同士にいろいろ話を聞きながら、自分もそう感じたとおっしゃった。

そういう意味で、今回は「ゆらぎと合理性」といいますか、それを止揚する。難しい言い方をするとディコンストラクション(脱構築)するという時代にあって、日本ではあまり知られていない、でもおそらく二〇世紀のドイツ、ヨーロッパの両世界大戦間を考える時に、最も重要な芸術家の一人であると思われる、オスカー・シュレンマーについて、ラマンさんに話してもらおうと考えました。

いま彼は、半分は南インドのケララに住んでいます。もう半分はミラノに近い、ルガノ郊外のオッゲビオという山村です。そこからミラノ経由でチューリッヒかダイレクト便で来ていただきました。

多面的芸術家としての一生

ラマン　お招きいただき、ありがとうございます。今日は楽しい時間を送るために、やってまいりました。新見先生はバウハウスに関しての専門家で個人的にも親しくさせていただいております。

バウハウスは、できたのがちょうど 90 年前、1919 年 4 月のことでした。優秀な生徒を集めてできた大学です。いま、バウハウス展というのは各地でやっています。ドイツのメディア関係者による、世界で一番包括的な展覧会は今ベルリンでやっているものだという話は本当ではなく、過去もっとも包括的な展覧会というのは、新見先生が 1994 年に行なった東京でのバウハウス展でした。まさに国際的なものでした。

ヨーロッパには過去、さまざまな芸術的な運動やコロニーがあった。そこには必ず、学びの学校的な要素がありました。たとえば、南スイスのアスコーナ、通称「モンテ・ヴェリタ(「真実の山」、「真理の山」とも訳される)」。その地は非常にスピリチュアルな聖地であり、1930 年代から 40 年ぐらいにたくさんの芸術家が集まった。オスカー・シュレンマーも 1927 年に訪ねています。私についてのそういう興味と関係から、ここに呼んでいただきました。

それでは映像を見ていただきながら、紹介をしていきます。まずこれは、第一次世界大戦で負傷したオスカー・シュレンマーです。兵士として出征しましたが、帰還して後、1919 年 9 月 2 日の日記に、「もっと革新的でロマンティックなものを描きたい」と書きました。

その十年後の日記には、「舞台・音楽・情熱。それらが自分の気持ちを表してくれるものだ。それを通して新しく、非伝統的であり、抽象的なものを描くことができる。もう古い考え方にとらわれずに自分の本能を表出するようなものを描ける。自分は新しい人間だ。もしかしたら、もう遅いかもしれない。否、手遅れというものはない。開放だ。」とあります。

オスカー・シュレンマーという人間は、何者だったのでしょうか。絵描きでもありダンサーでもあるような(さきほどの写真の、ダンサーは彼自身でした)、多面的芸術家(自分の肉体を使っての)でした。

私の祖父は 1888 年 9 月 4 日に生まれました。十六人兄弟の一番末っ子でした。そして第二次大戦中の 1943 年 4 月に、若くして亡くなりました。生まれはドイツの南西部で、両親は彼が 12 歳の時に亡くなったので、彼は姉に育てられました。姉とはなんと 17 歳も離れていました。

芸術家としての彼の活動は 1910 年にはじまって約 30 年間に渡り、生涯を全うしたわけですが、1930 年代はじめ、ナチスにより自由な活動が許されなくなった。残したいろいろな作品は、絵画も彫刻もありますが、すべて非常にユニークであり、20 世紀のなかでも際立った存在です。特にダンサーまたは振付け家として多くものを残しております。彼の作品により現代の演劇・舞台が生まれたのではないかとも考えられます。ダンスは、シュレンマーの全表現の核心でした。

学生時代には、いろいろな学校に通い、ベルリンにもいっています。そして第一次大戦に出征して、結婚して 1912 年から 16 年にかけて最初にダンス・パフォーマンスをやっています。

バウハウス時代は、1920 年にワイマールのバウハウスに勤め始めて、最初にトリアディック・バレエをしたのは 1922 年でした。バウハウスでは多くの作品を残していますが、1923 年に「人体=空

間」というパフォーマンスをしたり、凧とか提灯とか、バウハウス祭りの時に、日本にちなんだテーマで作品もつくっております。

さらに最後のデッサウのバウハウスの時代は、グロピウスなどと一緒に各種のワークショップを行ない、「人間」というテーマで授業もやっておりました。

特にその時代を象徴するものに、1932 年に描いた、彼の一番有名な作品だと思われる絵画「バウハウスの階段」があります。当時ドイツ領だったポーランドにもいって美術を教えておりました。1930 年初め、「パースペクティヴ」というコースを受け持っておりました。そしてドイツの状況が悪くなり、彼の作品はいろいろな批判を受けた。マゾヒストとかユダヤとかという言葉と共に、いわれのない罵声を浴びせられ、教職を追われました。ある手紙で、芸術に対してもっとも恐れるべき時代になったと書いています。

1933 年からが彼の最後の時代です。安定した収入もなく、また家族から離れ離れになり、1943 年には親友オットー・マイヤー・アムデンが亡くなりました。そしてドイツ南西部に逃げ延びて、家族と再会できました。妻や子供と羊を飼って過ごしていた幸せな時代でした。あるドイツの詩人に「内なる隠遁」という言葉がありますけど、この時代には「逃亡」という暗い例えもあります。

それからアメリカに移住したいと考え、ニューヨークの近代美術館にも連絡を取りましたが、彼の先輩同僚達がすでにアメリカにいっていたのに、彼は結局、いくことができなかった。1942 年に最後の、「窓辺の絵画」シリーズをつくりますが、身体が悪くなって亡くなりました。

祖父の芸術活動の多彩な魅力を解き明かすべく、語ってくださったラマンさん。

オスカー・シュレンマーの芸術性

彼の多面性ですが、画家であり、彫刻家、建築家、グラフィックデザイナー、版画家、教師、ダンサー、舞台衣装のデザイナーなど、バウハウスのパーティーの司会もして、演奏、作曲などもしています。ランプとか宝石のデザインも手がけました。トリアディック・バレエや、バウハウスでの棒や輪のダンス、コミック・バレエのような作品も残しました。右がコスチュームです。黄色と青のコスチュームで左がマスク。マスクは黄色と銀。二種類のマスクがあります。

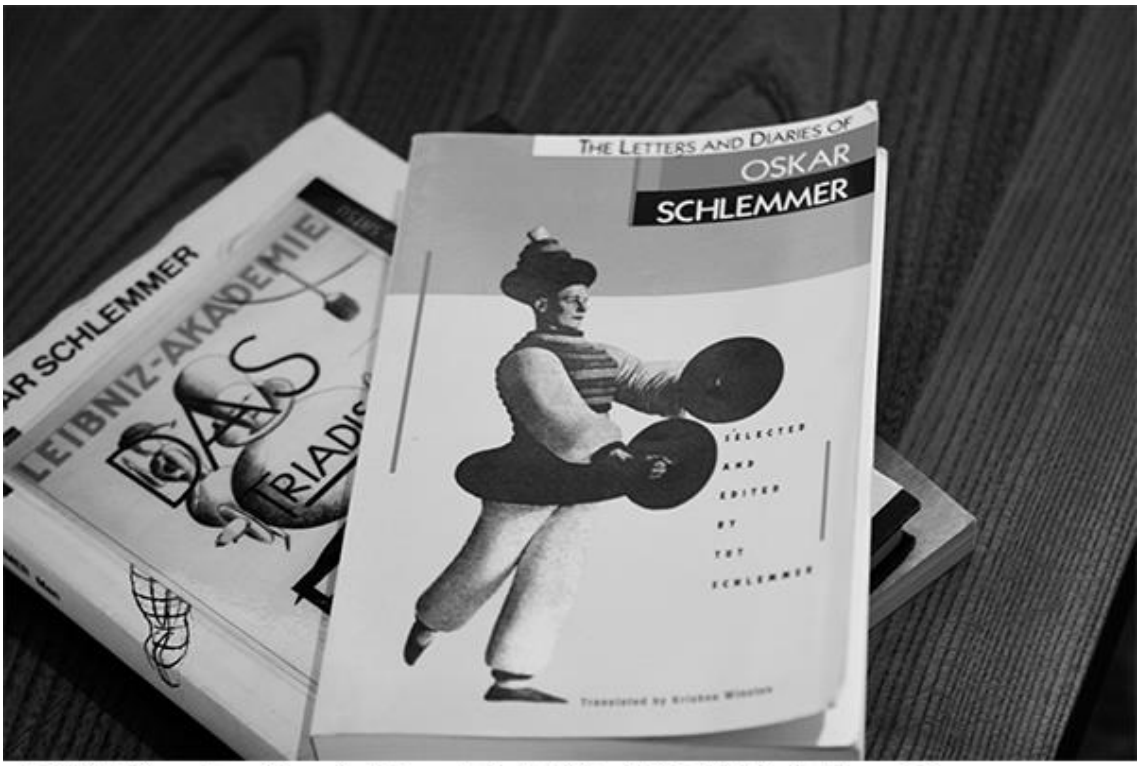
彼の全体像を表しているような芸術の典型がここに出ています。これが「抽象的」といわれている人形=衣装です。マスク、色の使い方、形、動き。そういったものの総合に、彼が表そうとしたことを見ることができます。トリアディック・バレエのダンサーです。

オスカー・シュレンマーは多くの手紙、日記、エッセーを残していて、1956 年に妻であるパット・シュレンマーによって、彼の日記と手紙が文集で出版されました。当時ドイツでは出版が非常に困難だったので、ドイツの読者たちの注目を集めました。

シュレンマーの才能は、多様なものを創造することができることです。文章を書くのがとても好きで上手く、彼は日記を通して世の中の人に理解されたし、現在も多くの芸術家にとって大きなインスピレーションとなっている存在です。

オスカー・シュレンマーは画家であり、ダンサーでした。手紙とか日記には、よく自分の中でのこの二つのものの葛藤が書いてあります。しかし、それが彼の芸術を生み出したのだと思われます。

「自分はリジッドで"幾何学的なもの"を使いながら、柔軟で"多重的多層的な合成物"を生みたい、そして身体すべてを、極めて、変幻する多重なる複合化合物のようなものにしたい。(通訳=非常に難しい説明で、私もはっきりわからないですが)。このように相反することを芸術は志向していて、幾何学的なものとそれを入れる可変的なる器の相関が、世界全体を表象し、ダンス・フロアーからピアノをひく指それから鍵盤にいたるすべてのさまざまな現象的なものを生み出している。」



「トリアディック・バレエ」をテーマにした書籍。表紙の演者はオスカー本人。

オスカー・シュレンマーの芸術と教育活動

ステージ、舞台において幾何学的なものを用いて行った最初のパフォーマンスが、1912 年のニュー・バレエです。そしてまた、トリアディック・バレエは 1916 年に舞台のフロアなどを工夫してつくられたものです。ピアノを使わずにやったものが 1926 年から 1927 年にうまれました。

トリアディック・バレエは三部作になっています。非常に愉快なものから真剣な世界に引き込んでいくものもあります。三部それぞれステージが変わり、最初のステージではレモンのような黄色のステージ・セットで、穏やかな、またちょっと面白いバーレスク的な雰囲気をかもしだしています。二番目のセクションは、ピンクの色をしたステージでお祭りのようなイメージをもっていますね。そして三番目は、黒いステージで、非常にミステリアスな雰囲気をかもし出すようなステージをつくりました。

十八のコスチュームに着替える十二人のダンサーによる上演ですが、三人のダンサーが着替えて舞台に立つので十二人が踊っているように見えます。トリアディック・バレエは、1922 年にシュツットガルトで初上演されました。

このバレエはまた、音楽的な意味合いをもっています。三和音的な意味合いですね。そして三部構成になっています。三という数字をシュレンマーはとても大切に思っていまして、「幾何学的」とか「間接=関連」的な方法をそこから生みだしている。現代的なテクニックをつかって、非常に古典的なものを表しています。

トリアディック・バレエで大切なのはダンサーよりも衣装です。衣装の動きがとても大切です。ある意味では静的、そして彫刻的な衣装がいろいろな動きをします。そしていろいろな動きのなかで、シュレンマー曰く「コスチュームが動いて歩く、建築物」となっています。

また、ワークショップを通して、シュレンマーはさまざまな実験をしました。鉄とガラスでできたバウハウス校舎全体を舞台にして、その時いろいろなダンスのスケッチをして生徒にいろんなことをさせました。たとえばパンの入ったタイツとか、マスクをつけさせ、彼は、動く人間というもの=踊る人間というものを、美術なものにつくり変えたわけです。

トリアディック・バレエではダンサーより、コスチュームより、もっと大切なのは空間の使い方そのものです。ライトの使い方、色の使い方、球を使ったり棒を使ったり輪を使ったり、またガラスだとかメタル、また木の棒を使ったりグローブを使ったりして、踊り手の動きそのものを空間のなかで強調したのです。ステージはいつも暗く、床を死角に区切って対角線を強調することで、空間を明確にしていました。よく使われた色としては赤、青、黄色、それに補足する形で黒とかグレーとか白を使いました。マスクは銀色だとか金色のものですが、あまり小道具は使わずに動きを表現しました。

バウハウスでのワークショップなどでは、よく人物のヌード画を描かせて、解剖学的な見地から人間の身体の動きを研究させました。授業の名前は「マン」「人間」と称して、彼独自の視点から人間

の動きを極めたものでした。生徒によると、必修のクラスではなくて、それこそ「出席できたことが非常に誇らしいというクラス、素晴らしいクラス」でした。

これは「人間」の、彼のひとつの作品、哲学的なものを含んだ教育にも使った作品です。教室にこの絵をもっていって人間の存在をこれで表していました。人間の道徳的な観念から精神的なもの、また地球との響きあい。地球との関連性を絵を使って説明しています。これも「人体」という図を使ったものです。

いろいろと書き込んでいるのはシュレンマーで、これを生徒に渡して彼らがまたそれを使って問題を解いている。このクラスはダンス、舞台を履修している人の必修でした。シュレンマーの考えていたのは、ダンサーというのは人間の解剖学的な知識がなくてはいけないということ。これは、頭の絵ですけど、コスチュームのデザインなんかもこれを見て考えていました。

今映っているのは、バウハウス当時の住居です。いちばん右の端が私の母です。

シュレンマーは二十代の後半には建築家達と一緒にいろいろ作品を作っております。舞台で得た経験などを建築のスペース空間などに生かしていて、建築家に影響を与えたと思います。

1941 年 7 月 9 日の日記にはこう書いてあります。「想像を強化させるような、色そして光を使う。それが人間によって可能になる。人間の知覚を通して可能になる。」彼の才能の特徴は、コミュニケーションに非常に正確だったということです。芸術家でもありダンサーでもあり作家でもありました。そしてバウハウスのスタイルではなく、彼の特別な才能は、たとえば色彩空間とかダンスとかに表れています。ダンサーとしての経験がとても大切なものとなっていて、あらゆる表現が、彼の人間のイメージにつながっています。

「感じること、そしてすべての事で必要なのは、純粋な感情、純粋な気持ち、純粋な考え、純粋な魂、そして自分が何を欲しているのかという内面をきくこと。」

1929 年のナイチンゲールという舞台があります。非常に日本の着物の影響をうけていますが、先ほど見せたスケッチはコスチュームのデザインです。

1929 年から 33 年にかかれた絵画です。建築的な要素と人間というテーマですね。これが一番有名な、絵画「バウハウスの階段」です。1932 年にバウハウスを離れて 3 年後に描かれたものですけど、生徒たちが描かれています。ニューヨーク近代美術館に収蔵されています。バウハウスの時代の一番象徴的な、デッサウの階段の絵画です。

これはマドリッドのレイナ・ソフイアにある美術館に、今年五月に展示されたフィギュリン(人形=衣装)です。私が再制作しました。写真に写っているのは私の母です。今年五月に撮ったものです。バウハウスにきて初めてシュレンマーが住んだ家です。とても綺麗な建物に見えますけど、とてもひどい建物で、当時はそこにしか住めませんでした。

ゲルハルト・マルクスという作家と一緒に住んでいた、デッサウ時代の教員住宅です。二軒長屋で二人家主が必要ということで、右側にシュレンマーが住んでいました。今ユネスコの世界遺産として登録されています。

ありがとうございました。こちらの方にさまざまな図録類を置いておきますのでぜひ後で見てください。私の祖父は短命でしたが、たくさん作品をつくり、作品集も多く、展覧会図録などもいくつも出しました。そのなかから、選りすぐりのものをもってまいりました。(基調講演終わり)

ラマンさんの豊富な映像資料で次々と紹介されるシュレンマーの多彩な芸術活動に、満席の観季館のゲストは目を瞠った。

宇宙のなかの肉体の「ゆらぎ」

新見　僕もずっとお話を聞きながらシュレンマーの事をどういう風に考えたらよいかなと思っていまして、すごく面白い人ですけど一体この人は何をやったのだろうかと、未だに難しく感じます。ラマ

ンさんのお話の中でいくつかキーワードがあったと思いますが、人間の身体を動いている建築だと考えていた。それで、ああいう非常に不思議なダンスを創案した。

動く建築というのは、天体そのもの宇宙そのものが建築ですから、人間の身体がミクロな天体のミニアチュールだということをシュレンマーは学生に勉強させた。デューラー以来、西洋の美術のなかに人体の合理性を徹底的に研究して、そのなかにある宇宙的原理を探っていこうということを、シュレンマーもやっていたと思うんですね。だけど球とか立体とかグリットのなかに人間のある種の生身の人間を押し込むと「原理」のなかに「ゆらぎ」ができるというか、だから今日ラマンさんのお話は、宇宙のなかの肉体の「ゆらぎ」というものをシュレンマーが考えたのだと僕は理解しました。

バウハウスはすごくまじめな芸術とか、宇宙の原理の勉強ばかりしていたのかというとそうではなくて、ラマンさんも少しお話されていたように、遊びというか先生と生徒とが一緒になって、凧祭りとかランタン祭りとか、五感を楽しませるようなフェスティバルというかお遊びというか、触覚の遊びというのを実験的にやっていた。

これもバウハウスの最近非常に注目されている側面です。授業がどうだったとか、クレーの色彩分析がどうだったという研究は進んでいますが、生身の人間が何を食べて、どういう顔をして踊ったりダンスをしたりしていたかということはなかなか伝わってこないものでして、ラマンさんのお話に少し出てきましたし、今後バウハウスの祝祭的側面も注目されるようになってくると思います。

今日は、すごく示唆的なお話をしていただきました。わざわざラマンさんにチューリッヒ経由で来てもらった甲斐があったと思います。本当にありがとうございました。

本日、非常に哲学的で美術的な難しいお話を通訳してくださったのは石渡誠さんです。ふだんはプロの英語教師として学生を指導されております。今回は難しい芸術用語とかにこだわるのではなく、シュレンマーが何を考えていたのかを一緒に感じて考えましょうと、それにマッチしたこなれた通訳をやっていただきました。